

ブロンズ像の指針 3

—『創立者の語らい』の書誌的・箴言的解説—

坂本 幹雄

make the work
*Walt Whitman*¹⁾

1. ブロンズ像の指針・補論

「英知を磨くは何のため 君よそれを忘るるな」
「労苦と使命の中にのみ人生の価値は生まれる」

小論は、創価大学の『創立者の語らい』(1995－2015) 27巻を主要テキストとして上記の創価大学のブロンズ像の2つの指針を解説しようとした坂本(2016a, 2016b)の続編である。前回までにブロンズ像の指針の含蓄をいくつも明らかにしてきた。また逆に『創立者の語らい』をブロンズ像の指針という原点から解説すれば、その本質的特徴をよく捉えうることもまた明らかになった。すなわち『創立者の語らい』をブロンズ像の指針という「原点への旅」(2:143)、その「重層化」として解釈してみた。以上をまとめて、ブロンズ像の指針⇔『創立者の語らい』として提示しておきたい。

小論は、たぶん補論的に書誌、座右の銘の2つの観点から考察する。坂本(2016a)において書誌的な部分は注記したが、まず今回はこの点を前半で改めてまとめておきたい。次に『創立者の語らい』の中の創立者自身の座右の銘を確認したい。ブロンズ像の指針は主として創価大学生の座右の銘となっているが、一方、『創立者の語らい』の中には創立者自身の座右の銘に関する言及がある。これを確認することもまたブロンズ像の指針の含蓄を明らかにする傍証となると思うからである。

2. 『創立者の語らい』書誌

まず坂本(2016a)に重複するが、表を補足して、改めてまとめていこう。表1に示すように『創立者の語らい』は、現在までにまず年代順に23巻が刊行されている。創価大学創立以前の1964年の設立構想から始まって2013年3月までのほぼ半世紀にわたる内容が収録されている。これに加えて、『記念講演篇』が3巻、『特別文化講座・随筆・長編詩篇』(『特別版』)1巻が刊行されている。第23巻は2013年3月の分までが収録されている。その後も多くの発信があつて、今後も続巻がありうるた

め完結しているというわけではない。なお『特別版』の「特別文化講座」の「人間ゲートを語る」は第12巻に、「革命作家・魯迅先生を語る」は第15巻に、各々重複収録されている。

ともかくこのような『創立者の語らい』27巻は、創価大学の創立者による当該の大学および海外の諸大学・学術機関に対して発信されたものを、ハンディなサイズの新書版として一気にまとめて読むことができ、壮観な『池田大作全集』²⁾(池田:1988-2015)の中のそれに匹敵する著作集となっている。

次に表2に『創立者の語らい』の各版を示す。『創立者の語らい』の前身は、

表1 『創立者の語らい』(1995-2015)

	収録期間	発行年月日
1	1971年10月～1979年3月	1995年3月16日
2	1979年4月～1988年3月	1995年3月16日
3	1988年4月～1991年3月	1995年3月16日
4	1991年4月～1994年11月	1995年3月16日
5	1995年3月～1997年11月	1999年11月18日
6	1997年11月～1999年9月	1999年11月18日
7	1999年11月～2000年4月	2002年5月3日
8	2000年5月～2001年1月	2003年5月3日
9	2001年1月～2001年7月	2003年11月2日
10	2001年7月～2002年3月	2004年5月26日
11	2002年4月～2002年11月	2004年9月30日
12	2002年11月～2003年3月	2004年11月4日
13	2003年3月～2003年11月	2005年5月3日
14	2003年12月～2004年6月	2005年11月18日
15	2004年8月～2005年3月	2006年6月15日
16	2005年3月～2005年7月	2007年1月2日
17	2005年9月～2006年1月	2008年1月2日
18	2006年2月～2007年3月	2008年8月24日
19	2007年4月～2008年2月	2009年1月26日
20	2008年3月～2009年3月	2010年5月3日
21	2009年4月～2010年3月	2011年2月11日
22	2010年4月～2011年3月	2012年3月16日
23	2011年5月～2013年3月	2015年5月3日
記1	1973年～1989年	1995年3月16日
記2	1990年～1994年	1995年3月16日
記3	1995年～1996年	2004年1月26日
特	(1998年～2005年)	2006年1月2日

注)「記」は『記念講演篇』。「特」は『特別文化講座・随筆・長編詩篇』(『特別版』)。
出所)筆者作成

『二十一世紀の潮流』である。これには6つの版がある。さらに『創立者の語らい』とタイトルが変わってから7つの版がある。『創立者の語らい』は当然ながら、版を重ねるにつれて収録数が増えて大部のものとなっている。なお表2の13の版の刊行後にも表2の12という別の版がある。ともかく表2の13が最大のものであり、現時点における決定版として、今回もこれをテキストとしている。

以下では、小論のテキスト『創立者の語らい』の収録基準に従い、研究対象となるべきものを、完全網羅するにはなお時間を要するが、さしあたって収集し、とりまとめおきたい。なお創立者の他の著作には、テキストと類似の言説が数多くあるのだが、收拾が着かなくなるので数箇所を除き言及しない。とりわけ海外の識者との対談集等は、対談相手の多くが、創立者の招待・創立者への名誉学位記授与等のために創価大学に来訪されており、テキストの中にも数多くの言及があり、関連文献としてたいへん重要ではあるが、別の課題として今回も立ち入らない。

まず表3に示すように『全集』との対応関係を確認する。コアとなる巻は、『全集』「教育提言」の「創価大学・創価女子短期大学」第59巻、第60巻、第142巻および第143巻の4巻分である。この4巻は全巻、創価大学関連の収録内容となっている。1971年から2006年3月まで収録され、『創立者の語らい』の第18巻のほぼ前半部分2までが対応する。『創立者の語らい』と『全集』の各々に単独収録のもの

表2 『二十一世紀の潮流』と『創立者の語らい』

	発行年	タイトル	編 者
1	1973年	『二十一世紀の潮流—創価大学に関する池田先生の指導』	昭和48年度入学式実行委員会
2	1974年	『二十一世紀の潮流』（昭和49年度版）	創価大学学生自治会新入生歓迎委員会
3	1975年	『二十一世紀の潮流』（昭和50年度版）	新入生歓迎委員会
4	1976年	『二十一世紀の潮流』（昭和51年度版）	新入生歓迎委員会
5	1977年	『二十一世紀の潮流』（昭和52年度版）	二十一世紀の潮流編集委員会
6	1978年	『二十一世紀の潮流』（昭和53年度版）	二十一世紀の潮流編集委員会
7	1981年	『創立者の語らい』（創立10周年版）	学生自治会十周年記念出版委員会
8	1984年	『創立者の語らい』（昭和59年度版）	学生自治会出版会編
9	1985年	『創立者の語らい』（創立15周年版）（上・下）	十五周年記念出版委員会
10	1990年	『創立者の語らい』（創立20周年版）（上・下）	「創立者の語らい」編集委員会
11	1992年	『続・創立者の語らい』（創立20周年版）（上・下）	「続・創立者の語らい」編集委員会
12	2000年	『創立者の語らい』（創立30周年版）（上・中・下）	創価大学学生自治会
13	1995－2015年	『創立者の語らい』1-23巻、記念講演篇1-3巻、特別版	創価大学学生自治会

注）発行はすべて創価大学学生自治会

出所）創価大学三十年誌編纂学生委員会編（2001）等を参考に筆者作成

表3『全集』と『創立者の語らい』との対応関係

巻 数	収 録 内 容
第1巻	講演 [創価大学での講演] 「スコラ哲学と現代文明」「文学と仏教」「人生と学問」「歴史と人物を考察—迫害と人生」論文 「教育の目指すべき道—私の所感」
第59巻	【教育指針】創価大学・創価女子短期大学1 (1971年11月～1990年3月)
第60巻	【教育指針】創価大学・創価女子短期大学2 (1990年4月～1997年3月)
第142巻	【教育指針】創価大学・創価女子短期大学3 (1997年4月～2002年3月)
第143巻	【教育指針】創価大学・創価女子短期大学4 (2002年4月～2006年3月)
第52巻	【挨拶】1990年8月～1994年11月
第53巻	【挨拶】1995年11月～2000年12月
第54巻	【挨拶】2001年1月～2004年10月
第55巻	【挨拶】2005年5月～2008年12月
第1巻	「海外の大学・学術機関での講演」 表4の1～8
第2巻	「海外の大学・学術機関での講演」 表4の9～27
第101巻	「海外の大学・学術機関での講演」 表4の29～31
第150巻	「海外の大学・学術機関での講演」 表4の32

出所) 筆者作成

があるが、『全集』第143巻は18本ある。また初期の「創価大学での講演」4本と『記念講演篇』第1巻の論文1本が『全集』第1巻に収録されている。創価大学における「挨拶」は『全集』第52巻、第53巻、第54巻および第55巻に収録されているが、単独収録がかなりある。『記念講演篇』に対応する講演は『全集』第1巻、第2巻、第101巻および第150巻に収録されている。『特別文化講座・随筆・長編詩篇』のうち、随筆は、『全集』第67巻、第120巻、第121巻、第126巻、第129巻、第130巻、第131巻、第133巻、および第134巻に、長編詩は、第43巻と第48巻に収録されている。

『全集』のほかに関連文献として、同一タイトル『創立の精神を学ぶ』の創価大学創価教育研究所編(池田2014a)と創価大学通信教育部編(池田2014b)、『21世紀文明と大乘仏教—海外諸大学講演集—』(池田1996)、創価女子短期大学の2編(池田2004,2016)、創価大学創友会編(池田2005a)、および創価大学通信教育部・開設30周年記念編纂委員会編(池田2005b)等がある。

2つの『創立の精神を学ぶ』のほとんどは『創立者の語らい』に収録されているが、両者には『創立者の語らい』には未収録の2本の重要な「教育提言」(全101:320-353, 354-378)が収録されている。創価大学HPの大学の理念のコーナーにも掲載されている(創価大学HP:大学案内>創価大学の理念>創立者池田大作先生>教育提言)。このほか各々に単独収録のものがある。前者単独収録は小説『新・人間革命』第15巻の「創価大学」の章、後者単独収録は小説『新・人間革命』第23巻の「学光」の章、創価大学通信教育部機関誌『学光』への特別寄稿300号記念、400号記念、開設20周年記念、開設30周年記念、および「創価大学通信教育部の皆様へ贈る」詩である。以上はいずれも『創立者の語らい』には未収録である。

表4 創立者の海外の大学・学術機関における講演

	年 月	大学・学術機関	国・地域	タイトル
1	1974年4月	カリフォルニア大学ロサンゼルス校	アメリカ	21世紀への提言—ヒューマニティの世紀に
2	1975年5月	モスクワ大学	ロシア	東西文化交流の新しい道
3	1980年4月	北京大学	中国	新たな民衆像を求めて
4	1981年3月	グアダラハラ大学	メキシコ	メキシコの詩心に思うこと
5	1981年5月	ソフィア大学	ブルガリア	東西融合の緑野を求めて
6	1983年6月	ブカレスト大学	ルーマニア	文明の十字路に立って
7	1984年6月	北京大学	中国	平和への王道—私の一考察
8	1984年6月	復旦大学	中国	人間こそ歴史創出の主役
9	1989年6月	フランス学士院	フランス	東西における芸術と精神性
10	1990年3月	ブエノスアイレス大学	アルゼンチン	「融合の地」に響く 地球主義の鼓動
11	1990年5月	北京大学	中国	教育の道 文化の橋—私の一考察
12	1991年1月	マカオ大学	マカオ	新しき人類意識を求めて
13	1991年4月	フィリピン大学	フィリピン	平和とビジネス
14	1991年9月	ハーバード大学	アメリカ	ソフト・パワーの時代と哲学
15	1992年1月	香港中文大学	香港	中国的人間主義の伝統
16	1992年2月	ガンジー記念館	インド	不戦世界を目指して—ガンジー主義と現代
17	1992年6月	アンカラ大学	トルコ	文明の揺籃から 新しきシルクロードを
18	1992年10月	中国社会科学院	中国	21世紀と東アジア文明
19	1993年1月	クレアモント・マッケナ大学	アメリカ	新しき統合原理を求めて
20	1993年2月	ブラジル文学アカデミー	ブラジル	人間文明の希望の朝を
21	1993年9月	ハーバード大学	アメリカ	21世紀文明と大乘仏教
22	1994年1月	深圳大学	中国	「人間主義」の限りなき地平
23	1994年5月	モスクワ大学	ロシア	人間—大いなるコスモス
24	1994年6月	ボローニャ大学	イタリア	レオナルドの眼と人類の議会—国連の未来についての考察
25	1995年1月	ハワイ・東西センター	アメリカ	平和と人間のための安全保障
26	1995年6月	アテネオ文化・学術協会	スペイン	21世紀文明の夜明けを—ファウストの苦悩を超えて
27	1995年11月	トリブバン大学	ネパール	人間主義の最高峰を仰ぎて—現代に生きる釈尊
28	1996年6月	サイモン・ヴィーゼンタール・センター	アメリカ	牧口常三郎—人道と正義の生涯
29	1996年6月	コロンビア大学	アメリカ	「地球市民」教育への一考察
30	1996年6月	ハバナ大学	キューバ	新世紀へ 大いなる精神の架橋を
31	1997年10月	ラジブガンジー現代問題研究所	インド	「ニュー・ヒューマニズム」の世紀へ
32	2007年3月	パレルモ大学	イタリア	文明の十字路から人間文化の興隆を

出所) 池田(1996)、記1-3、『全集』、宮川(2007:32) および創価大学HP等を参考に筆者作成

創立者の海外の大学・学術機関における講演は、表4に示すように現在までに32本ある。『21世紀文明と大乘仏教』の27本の講演のうち26本が『創立者の語らい・記念講演篇』に収録されている。加えて『創立者の語らい・記念講演篇』第3巻には『21世紀文明と大乘仏教』刊行後の講演3本が収録されている。その収録数は、表4の26、31、32を除く29本である。

以上、当面の研究対象を改めてまとめてみた。この分野の研究の一助となれば幸いである。

3. 座右の銘—その典拠をめぐって

小論の後半は『創立者の語らい』の中の創立者自身の座右の銘を確認する。ブロンズ像の指針は主として創価大学生の座右の銘となっているが、一方、『創立者の語らい』の中には創立者自身の座右の銘に関する言及がいくつもあって、学生に対し、これもまたそうあってほしいとの期待が込められているはずである。以下、「波浪は障害にあうごとに、その堅固の度を増す」、「午前八時の青年の太陽」、「学ばずは卑し」を中心にその次第とその典拠を明らかにしていきたい。

波浪は障害にあうごとに、その堅固の度を増す

創立者の座右の銘といえは、まずはこれだろう。創立者の子息が記した次の印象的な一節から始めよう。

「私の本箱に、一冊の古い単行本がある。／昭和6年(1931年)発行の『ナポレオン』(鶴見祐輔著)である。父が若いときに神田の古本屋で買ったのか、あるいは、父が10代の頃に近所の青年たちとつくっていた「郷友会」という読書グループで使っていたものかもしれない。……『ナポレオン』の本を手にするたびに、父が青春時代にこの本を読みながら、何を思い、何を決意していたのかと、考えさせられる。／この本の余白のページに、父の若々しい躍動した文字で、こう書かれてある。／「波浪は障害にあうごとに、その堅固の度を増す」(池田2008:40,48)引用文の前半は冒頭部分(「起」)である。「承」として読書論が展開され、引用文の後半は、著者のコルシカ島訪問の「転」の記述に続く「結」の部分である。

それではこの「格言」の『創立者の語らい』の初出部分からあげていこう。次のように「3分間スピーチ」³⁾の中で2つの座右の銘が語られている。

「私が17歳の頃より、座右の言葉とした一節があります。それは「世界人類のために尽くさんと思わば、まず自分自身の悲哀を制覇せよ」という言葉であります。ともかく常に自分が出発点であり終着点である。自分との挑戦が一切である。故に自分と戦い勝つことが、一切の勝利に通ずる。もう一つは「波浪は障害にあうごとに、その堅固の度を増す」という格言であります。これらが、私の一つの青春時代の人生の歩み方を決めた言葉でありました。波浪というのは、岩という障害にあうごとに、その堅固の度を増す。まことに男性的、革命的な響きが好きであった。真実の革命時に、そして世界の平和に戦い挑む指導者に嵐と難のあ

ることは当然である。この「波浪は障害にあうごとに、その堅固の度を増す」という格言を、我が愛する創大生に贈って、私の3分間の話とさせていただきます。」(1:161-162)

もう1つ「世界制覇」の座右の銘があげられている。これについては、2002年の「創価大学特別講義」の中で次のように語られている。

「自分自身の世界観を持て」と申し上げたい。／すなわち、それは、自分自身の人格であり、信念であり、正義とも言えるでしょう。「世界制覇せんとするものは、汝自身の悲哀を制覇せよ」との先哲の言葉があります。私の好きな言葉の一つです。／大事なものは、胸中に確固とした世界観、歴史観を確立することです。／それがなければ、「世界を相手に勝つ」ことはできません。／根本は、「世界を平和にしていこう」「人類を幸福にしていこう」という強い強い信念があるかどうかです。その心があるかどうかです。その心がすべてです。「心こそ大切」なのです。」(11:92-93)

「先哲の言葉」が典拠とされている。「心こそ大切」は「ただ心こそ大切なれ」(日蓮1952:1192)という仏典の一節である。

次は周恩来首相や延べ18年間の獄中生活を耐え抜いた「インドの良心」J・P・ナラヤン氏に言及した「ふところ深い」生き方・人間論の文脈の中で次のように語られている。

「それらの人々は、厳しさのなかにも、どこか余裕があり、相手を包み込むような温かさや優しさをそなえて持っているものであります。つまり、ふところが非常に深いのであります。／「波浪は障害にあうごとに、その堅固の度を増す」とは私の好きな言葉ですが、そうした深さというものは、幾多の風雪に耐え、なお理想を追い続けた人にして、初めて可能になるというのが、私の偽らざる実感であります。」(1:215-216)

この格言は、海洋のレトリックであるが、さらにこの関連から言及されているものがある。浙江海洋学院「名誉教授」称号授与式の謝辞「人類共生の大海原へ 教育と文化の金波を」は、海洋文化論的に展開され、最後にこの格言が贈られている(22:66)。またアイヴァゾフスキーの絵「第九の怒濤」に関する詩の中で「私の青年時代からのモットー」(『全集』49:451)であるという一節がある。

さてこの格言の典拠の方であるが、最大のヒントはおそらく次の一節だろう。第11回創大祭記念講演「歴史と人物を考察—迫害と人生」の中に次のような一節がある⁴⁾。

「私は、十代の時に読んだある西洋の哲学者の「波浪は障害にあうごとに、その堅固の度を増す」との格言が胸に迫り、大好きでありました。言うなれば、この格言を土台として、人生を歩んできたともいえるかもしれません。」(2:36)

関連して、もう少し探ってみよう。『全集』収録の「随筆 新・人間革命」の中では次のように述べられている。

「よく神田の古書店に足を運び乏しい小遣いをはたいては、一冊、また一冊と書を探め、貪るように読み耽っていった。／そして、感動した言葉、心に染みた一

節を、ザラ紙に雑記帳に抜き書きしていった。「一人立てる時に強きものは、真正の勇者なり」「波浪は障害にあうごとに、その堅固の度を増す」……」(『全集』129:208-209)

前者はシラーのことばである⁵⁾。小説『人間革命』第1巻中の章のタイトル「一人立つ」(『全集』144:133)にもなっている。この章の末尾(『全集』144:169)で引用されている。

さらに「長編詩 われらは戦う！ 人権と平和と幸福のために一忘れ得ぬ戦時の青春」には次のような一節がある。

「当時 どの本から見つけたか／ある英知の言葉があった。「波浪は／障害にあうごとに／その頑固の度を増す」／さらにまた／ある賢人の言には／「艱難に勝る教育なし」／いずれも／わが青春の座右の銘と決めた。／私は私の部屋に／この言葉を書いて飾った。／この忘れ得ぬ読書も／終戦の年／十七歳の時であったと／記憶する。」(池田2009:44-45)

後者は、おそらくディズレーリの小説『エンディミオン』の中のことばだろう⁶⁾。ちなみに類句に「艱難汝を玉にす」がある⁷⁾。これは山本有三の『路傍の石』の章のタイトル(山本1980:237)になっている⁸⁾。

結局、今回、典拠について判明したのは「西洋の哲学者」、「ある英知の言葉」というところまでであった。文脈上、ナポレオン、シラー、ディズレーリ等ではないだろう。力及ばず、今後の課題としたい。

午前八時の青年の太陽

『創立者の語らい』所収の第10回創価大学入学式の祝辞の中で次のような新入生に対する期待が表明されている。

「諸君は午前八時の太陽であります。太陽は、いついかなる時でも、厳として変わらざる光彩を放っております。“日々新たにして、日に日に新たなり”⁹⁾」の気概を持って汝自身の進歩と向上の戦いをお願いしたいのであります。」(2:102)

この「午前八時の太陽」の初出はたぶん詩「青年の譜」だろう。「青年の譜」の冒頭は次の通りである。

「天空に雲ありて／風吹けど／太陽は 今日も昇る／午前八時の青年の太陽は^{かれ}／無限の迫力を秘めて／滲透しつつ 正確に進む／己の厳しき軌道を はずさずに／天座のかなた 蒼穹狭しと／王者赫々と／太陽は ただ黙然と進む」(全集39:15)

この「午前八時の太陽」については、天津外国語大学名誉教授称号受章の謝辞の中に次のような一節がある。

「まさしく青年は、昇りゆく旭日であります。時代の混迷の闇が深ければ深いほど、青年の向学の英知が光ります。不屈の情熱が光ります。快活なる連帯が光るのであります。私は若き日から「午前八時の太陽」という言葉が大好きです。「午前八時の太陽の如く」を合言葉に友と励まし合いながら、ありとあらゆる苦

難を乗り越え、勝ち越えてきました。』(創価大学公式サイト「ニュース」・「2014」・「2014年05月16日 中国 天津外国語大学から創立者へ名誉教授称号」)

天津外国語大学の校章には、「青き地球を背景に、壮麗な鐘楼とともに、「午前8時」を告げる時計」が描かれている。この点から言及されたものと思われる。なお上記引用の謝辞では上記の「青年の譜」の冒頭が贈られている。

さて中国では毛沢東の談話の中にある「午前8時、9時の太陽」ということばが有名である。次のような一節である。

「30. 青年／世界は君たちのものであり、また、われわれのものでもある。しかし、結局は君たちのものである。君たち青年は、午前8時、9時の太陽のように、生氣はつらつとしており、まさに、旺盛な時期にある。希望は君たちにかけている。／…………… 世界は君たちのものである。中国の前途は君たちのものである。／モスクワでわが国の留学生、実習生と会見したときの談話 (1957年11月17日)」(中国文革研究網 毛主席語録 (Japanese edition))

天津外国語大学の校章「午前8時」の時計が、この毛沢東語録由来かどうかは、定かではない。一方、詩「青年の譜」の「午前八時の青年の太陽」に毛沢東、周恩来へのリスペクトや「日中国交正常化提言」(『全集』150:294-304)の背景があるのかも定かではない。そもそも毛沢東の青年への期待の表現は、「午前8時、9時の太陽」である点で微妙でもある。ちなみに劉継生氏によれば、「午前8時、9時の太陽」は1960年代から70年代にかけて中国の学校教育の中で人口に膾炙していたことばとのことである。これが日本へも流布したものなのかどうか定かではない。

なお管見のかぎり、Morning's at seven と朝の時刻を表現した詩が1つ、ロバート・ブラウニングの「ピパの唄」にある。次の詩である。

「春の朝／時は春、／日は朝／朝は七時／片岡に露みちて、／揚雲雀なのりいで、／蝸牛枝に這ひ、／神、／そらに知ろしめす。／すべて世は事も無し。」(Browning1942:8, 上田1985:116)¹⁰⁾

これは文脈から見て関係がなさそうである。しかしこれは著名な上田敏訳詩集『海潮音』所収の一編である。青年読書家であった詩人の着想に影響がなかったと断定はできない。それはまた山本有三の『心に太陽を持て』(山本1981)なども同様だろう。

あれこれとその着想を探っているが重要なことを忘れてはならない。仏教の観点である。『友へ贈る』の中に次のような一節がある。

「今日も 太陽の仏法と共に／今日も 午前八時の太陽を／胸中深く輝かして／軌道をまっしぐらに／前進してくれ給え」(『全集』38:514)

さらにまた次のような一節がある。

「太陽と共に勤行／夕日と共に座談会」(『全集』38:538-539)

これまでの着想の関連に関する愚考は、まさに見当はずれであって、徒労に帰すものかもしれないと思わせる一節である。「太陽の仏法」＝「日蓮大聖人の仏法」(『全集』38:374)であり、仏道修行の朝の「勤行」とつながっているからである。この文脈で朝8時に端座することはごく自然なことである。

いずれにしても格調高く雄渾な詩「青年の譜」の「午前八時の青年の太陽」のオ

リジナリティーは揺るぎない。そして時を経てさらに上記の天津外国語大学との交流に見られるように「日中友好の架け橋」を象徴するかのような詩ともなったのである。

学ばずは卑し

「学ばずは卑し」(2:18)

「「学ばずは卑し」という古人の言葉を、私は今もって、座右の銘としている。」
(特231)

「学ばない人は卑しい」(特249)

「今もって」とあるが、著者、当時75歳にして、この言である。まさに「生涯青春」「生涯勉学」である。

さてこの「古人」とはだれか。『全集』収録の「随筆 新・人間革命」の中には次のような一節がある。

「「学なければ卑し」とは、ある裁判長の言われた有名な言葉である。その通りだ。／「学ばずは卑し」である。私も若き日より大好きな言葉であった。」(『全集』133:58)

この後、次のような一節が続く。

「学びゆく人には、未来があり、希望があり、輝く勝利が待っている。学ばざる人は、未来は闇のごとく、人間の魂の輝きがなくなっていく。／人生の勝利と幸福の決定打の一つは、学びゆく人に軍配があがる。」(『全集』133:58)

学ばざる者は、「未来は闇のごとく、人間の魂の輝きがなくなっていく」とまことに肅然とする一節である。さらに次のようにも述べられている。

「「学ばずは卑し」とは、これまで幾たびも綴らせていただいた言葉である。／かつて、ある日本の高名な裁判長が語った教訓に感銘し、私なりに自戒の言葉としてきたものだ。それは、私の胸に突き刺さり、今でも離れることはない。」(『全集』134:156)

裁判長とは、三宅正太郎氏(1887-1949)である。次のような経緯を語った一節がある。

「ある著名な作家の方が「ぜひ、お読みください」と推薦してくださった本があります。／『裁判の書』という、著名な裁判官が著した本です(三宅正太郎著、創元文庫、絶版¹¹⁾)。早速、取り寄せて読んでみました。じつに深い人間への洞察がちりばめられていました。感嘆しました。……『裁判の書』のなかに、特に光を放っていた名句がありました。／「学なければ卑し」という言葉です。」(11:84)

この後、「学ばずは卑し」として次のように厳しく学生に対して説いている。

「私は、創大生の皆さんに、以前にも、「学ばずは卑し」と少々、お話したことがあります。／何も学ぼうとしない、勉強しない、努力しない—これは、人生にとって最も愚かであり、最も卑しい人間です。／お金や榮譽を得ることよりも、人間として一番大事なのは、「学ぶ」ことです。／いくら有名人でも、学ぶ心のない人は尊敬できません。一生涯、学び続ける—その人を尊敬すべきです。／学問は、自分自身の不滅の権利です。人間としての権利であり、義務といえましょ

う。どうか、生涯、「学び続ける心」を忘れないでください！」(11:85)
その『裁判の書』の一篇「學なければ卑し」の冒頭は、次のように述べられている。
「江木司法大臣のとき司法研究制度が司法部最初の試みとして行われた。その第一回の会同の劈頭、時の大審院長横田秀雄博士は、研究員に対し「学なければ卑し」という語を示して訓諭された。私はその典拠を究めていないが、爾来十数年この語は、意味の深い言葉として私の頭脳に残っている。」(三宅2006:129)
「横田秀雄大審院長」がもとになっているが、なお「その典拠を究めていない」とある。このエッセイの結論は次のように述べられている。
「智慧才覚だけで立っている者は、いざという場合に見苦しい態度を示して卑しさを露呈する。この意味において、裁判官は、濫りに他のために動かされざるためにも、法律学を究める必要がある。そこに「学なければ卑し」の意味がある。」(三宅2006:130)
各自、深く専門を究めて決然たれ、と普遍的に解することができるだろう。

4. 中間まとめ

前回まで基本的枠組みとして『創立者の語らい』のその含蓄に富んだ数々の名言を提示し、創立者の経験的・理論的根拠を探りつつ考察を加えてきた。とりわけ私は経済学徒であるから、経済思想の観点からも論及してきた。

坂本(2016a)では、ブロンズ像の指針を主として「英知を磨く」、「何のため」、「労苦と使命」、および「人生の価値」に分解して考察した。前者は主として知識と知恵の二分法、原点論の観点から、後者は仕事論、価値論の観点からの考察となっている。

続編の坂本(2016b)では「学光」、偉人謙虚論、教育聖業論、原点論(再論)、および時間論・場所論・自分論について考察した。

そして2つのブロンズ像の指針のいずれについても、典拠となる古典引用、創価思想の伝統、仏教哲学という『創立者の語らい』のそういつてよければ論証の基本的構図に則ってまとめた。

今回はたぶんに補論的に書誌的整理を行い、加えて創立者自身の座右の銘を対象とした間接的アプローチをとった。かくしてその典拠と広がりを探りつつ、創立者自身の座右の銘もまたブロンズ像の指針に加えて、銘記するよう勧奨されている次第を確認することができた。

次の課題は、一言(坂本2016a:98)、言及しただけで終わったAI時代(第3次AIブーム)におけるブロンズ像の指針の持つ重みを考察してみることである。これをもってひとまず「原点への旅」に一段落をつける予定である。

注

- * 『創立者の語らい』からの引用は巻数と頁を 1:1、『記念講演篇』は 記 1:1 のように記す。
『特別文化講座・随筆・長編詩篇』は、奥付に『特別版』ともあり、特 1 のように頁を記す。
『池田大作全集』は『全集』と略記し、巻数と頁数を 1:1 のように記す。
- 1) ホイットマンの机上に置かれていたモットー (Hyde2015:190)。筆者の座右の銘として
いる。ただしというべきか、もちろんというべきか、詩ではなく論文である。
- 2) 『全集』は 150 巻で完結したが、続編が必要だろう。たぶん補巻程度ではカバーでき
ないほどに対談集や詩集等の未収録作品が大量にある。とりわけ大河小説『新・人間革
命』(1988-2016) は、現在までに 28 巻が刊行され、なお新聞連載中である。『全集』の将
来の第 2 シリーズの実現に期待したい。
- 3) 「世界で最高の演説といわれているのは、イタリアのある指導者の演説ですが、それ
はたった 3 分間だったといわれている」(1:161) にちなむ。「イタリアのある指導者」が
キケロやカエサルなどなのかどうか明らかではない。今後の課題としたい。
- 4) なお後年、この講演に関するエッセイがあり、その中では次のようにも繰り返され
ている。「冒頭、若い日からのモットーに触れた。すなわち「波浪は障害にあうごとに、
その堅固の度を増す」と。偉大な事業をなすためには、幾多の障害があつて当然で、そ
の時こそ、自らが逞しく鍛えられ、光り輝くことを忘れてはなるまい。実に苦難は、人
生を闇から暁へ、混沌から秩序へ飛躍させていく回転軸なのである。」(特 183)
- 5) シラーからの出典については、田中 (2006:124-125, 138) の考察がある。
- 6) there is no education like adversity. (Disraeli 1976:395)
- 7) 経済学徒である筆者にとって印象的であったのは、次のマルサスの初版『人口論』
の一節である。「艱難汝を玉にす。毎日の経験は、われわれに、こう教えている。われ
われが自分を、または、家族を支えるためには、どうしても努力が必要である、その
ために、そうでなかったら眠りつづけるであろう才能が芽を出すのである。だからこ
そ、よくいうのである、新奇なひどい目にあわなければ、盤根錯節を断つに足る材が
養われないと」(Malthus1966:371 訳 210-211)。神議論の章の掉尾ではある。原文は That
the difficulties of life, contribute to generate talents, every day's experience must
convince us. たぶん高校の英語の時間などに西洋の古いことわざとして習った一文は、
次の通り。Adversity makes a man wise.
- 8) たとえば『路傍の石』(山本 1980) への言及として、池田 (2009 : 257) を参照。
- 9) 『大学』(赤塚 1967 : 61)。坂本 2016b:75 注 23。
- 10) 平井 (1968) が英和対照で便利である。
- 11) 参考文献に記すように、その後、復刊された。

参考文献

池田大作 (1995 - 2015) 『創立者の語らい』全27巻 (既刊分)、創価大学学生自治会編 (特別版のみ創価大学学生自治会編集委員会編)、創価大学学生自治会。

*

池田大作 (1988-2015) 『池田大作全集』全150巻「池田大作」刊行委員会編、聖教新聞社。

*

池田大作 (1996) 『21世紀文明と大乘仏教－海外諸大学講演集－』聖教新聞社。

池田大作 (2004) 『創立者スピーチ集・創立者と私』創価女子短期大学学生会編、創価女子短期大学学生会。

池田大作 (2005a) 『創価教育の源流』創価大学創友会編、創価大学創友会。

池田大作 (2005b) 『学は光－創立者の指導集』創価大学通信教育部・開設30周年記念編集委員会編、創価大学通信教育部。

池田大作 (2009) 『詩集 勝利の舞』聖教新聞社。

池田大作 (2014a) 『創価大学 創立の精神を学ぶ』改訂版、創価大学創価教育研究所編、学校法人創価大学。

池田大作 (2014b) 『創価大学 創立の精神を学ぶ－創価大学通信教育部編』創価大学通信教育部編、学校法人創価大学。

池田大作 (2016) 『創立の精神を学ぶ－創価女子短期大学編』創価女子短期大学「創立の精神を学ぶ」編集委員会編、学校法人創価大学。

池田大作 (1998 - 2016) 『新・人間革命』全28巻 (既刊分)、聖教新聞社。

*

赤塚忠 (1967) 『新釈漢文大系2 大学 中庸』明治書院。

Browning, Robert (1942) *The Selected Poems of Robert Browning*. The Classics Club. New York : Walter J. Black.

Disraeli, Benjamin (1976) *Endymion*. in *The works of Benjamin Disraeli, Earl of Beaconsfield : embracing novels, romances, plays, poems, biography, short stories, and great speeches*. vol.19. New York : AMS Press.

平井正穂編 (1968) 『イギリス名詩選』新潮文庫。

Hyde, Lewis (2007) *The Gift: Creativity and the Artist in the Modern World*. 25th Anniversary Edition. New York: Vintage Books, A Division of Random House.

池田博正 (2008) 『新装改訂版 随筆 青春の道 私の若き日の記録』鳳書院。

Malthus ,Thomas Robert (1966) *First Essay on Population 1798*. New York :Macmillan St Martin's Press. 『初版 人口の原理』高野岩三郎・大内兵衛訳、岩波文庫、1962年。

宮川真一 (2007) 「21世紀文明をめぐる仏教的理念」創価大学通信教育部学会編『創立者池田大作先生のご思想と哲学』第3巻所収、31-49、第三文明社。

三宅正太郎 (2006) 『裁判の書』慧文社 (初版、1942、牧野書店)。

日蓮 (1952) 『新編日蓮大聖人御書全集』堀日亨編、創価学会。

坂本幹雄 (2016a) 「ブロンズ像の指針－『創立者の語らい』の箴言的解読－」創価大学通信教育部学会編『池田思想研究の新しき潮流』所収、79-118、第三文明社。

坂本幹雄 (2016b) 「ブロンズ像の指針・再論 —『創立者の語らい』の箴言的解説2—」『通信教育部論集』(創価大学通信教育部学会) 19:59-78

創価大学三十年誌編纂学生委員会編 (2001) 『創価大学三十年誌 [学生編]』創価大学学生自治会。

田中亮平 (2006) 「体験としての読書」創価大学通信教育部学会編『創立者池田大作先生の思想と哲学』第2巻所収、117-140、第三文明社。

上田敏 (1985) 『定本上田敏全集』第1巻、上田敏全集刊行会編、教育出版センター。

山本有三 (1980) 『新編 路傍の石』新潮文庫。

山本有三 (1981) 『心に太陽を持て』新潮文庫。

Web Site (2017年3月16日アクセス)

創価大学 <http://www.soka.ac.jp>

中国文革研究网 <http://www.wengewang.org/read>.